

第2回次世代協議会第三部会（地域・環境）概要

平成 17 年 11 月 11 日（金）午前 10 時から
区役所本庁舎 6 階 第二委員会室

出席者 福富護、鈴鹿美佐子、玉盛正陽、田谷節子、飯島泰文、新倉康夫、青木俊明、
塚本里子、
戸塚警察署 代理 生活安全課長 山形哲、
四谷警察署 代理 防犯係長 道祖土 弘
新宿消防署 代理 予防課長 長谷川伸生

1 開会 福祉部子ども家庭課長

2 挨拶 福祉部長挨拶

3 議 事

(1) 次世代育成推進にあたっての課題について

部会長

前回、現状把握、点検、課題の抽出を行った。これに基づき、課題の絞込みを行った。
仮に絞り込んだもので、これにこだわることはない。

育成活動を活性化するには

子どもを地域でどう支援するか（居場所・地域での活動）

ハード面の安全な環境づくり（バリアフリー・住環境問題）

ソフト面の環境づくり（相談にのれる体制づくり）

異世代との交流・ふれあいをどうするか

事前提出された、課題解決の方策について説明願いたい。

委員... 1 について

核家族が多い。（子育てをしている保護者が）自分の母親の立場で相談できる人がいない。同じ世代では解決策が見つからない。子育ての先輩や子育てを終えた方、保健師等のプロに話が聞けるなど、アドバイスを受けられる環境を整えることが必要だと思う。また、安心して相談できる場所があればよい。例えば、児童館等子どもだけでなく、親も安心できる場所ができればいい。

委員... 2 について

地域での子どもたちへの声かけが必要。この人は安心だよというワッペンやバッチなどをつくり、身に着け、声かけできる状況をつくる。子どもに大人の目があるという意識を持たせる。大人にもそういう意識ができる。マンネリ化防止のため、年に数回程度やってみたらよい。一寸したこと、一人ひとりができる活動からはじめてはどうか。

委員... 3 について

育成会活動の活性化について

親、大人としての認識が不足している。意識改革が必要。親と学校、親と育成会など関係が途切れている。特に親と育成団体との関係が途切れているのではないか。親と活動する側との中間の地点にある学校と行政がもう少し関わってほしい。地域のなかでは、それぞれの団体が様々活動しているが、参加する意識が高まってこないのはどういうこ

となのか。だからなかなか（青少年の問題も）解決策が見いだせない。子どもの身近にいる先生たち・学校の力が重要。学校での仕事で忙しいだろうが、先生が地域と関われる体制づくりも必要となってくる。学校の中でもゆとりを持ってそういう活動に参加できるような体制づくりを行政も考えるべきである。

委員... 4 について

子育てよりも親育てではないか。警察や学校も含めて関係者が親の態度を変えていく必要があるのではないかと、原点に立ち返って、いろいろなところでふれ、活動していく必要がある。育成会の活動もマンネリ化している。スタッフが高齢化し、出る人も同じ。子どもの目線で見えていくことが大切ではないか。

親の意識改革については、PHP の教育政策研究会の政策提言で明星大学 高橋史朗先生が、「学校を親が変わる拠点としていく。」と言っている。学校を親としての育ちの場、親が変わるための拠点としていきたいということだ。

最近の親は、子育てが親のがまんや犠牲を強いていると考える風潮があるが、そのような考え方でいいか。

委員... 5 について

大人どうしがつながりを持っていく。育成団体も横のつながりの強化が必要だ。

シニアリーダーとしての中高生が地域で子どもたちを育てていく手助けをするということ。育成会活動に加わってもらいたい。そういう世代を育てていくこと。

家庭の中では子どもの仕事がない。活動の中で子どもに仕事をさせ、役割を与え、責任を持たせることが大切。それを大人がフォローしていく。

大人同士がつながり、育成にかかわるすべての方が手をつないで、また、出張所の職員も学校の先生も関わり、行事のなかで呼びかけていく。

委員... 6 について

大人が行事を決めて、子どもを召集。これでは楽しくない。それではだめなので、最初の話し合いの段階から子どもたちに入ってもらって一緒にやっていくべきではないか。柏木育成会では西新宿中学と西戸山中学があり、ドッチボールや百人一首大会を中学生に声をかけ、最初から子どもたちに関わってもらっている。大人が子どもの都合に合わせることも時には必要ではないか。最近も大江戸ダンスに小学生 30 人、中学生 10 人が参加し、今も来年に向け体育館を借りてやっている。楽しいから来てくれる。子どもも大人も楽しめる行事がよい。

委員... 8 について

四谷子どもネットワークでは、地域ぐるみで警察ともタイアップしながら活動している。育成会もいろいろな活動をしているが、育成会活動の一般の保護者への認知度は低く、育成会の良さは入ってみなければ分からない。知っていただくことが大切だと感じた。そこで、四谷地区育成会では、今年はPRの年にして、PRビデオを作成中。12月に入ったら上映会を行う。保護者の方からも協力をいただく。子どもたちを取り込むことで、親に認知される。

四谷の地区協議会や四谷ひろばの協議会にも関わっている。

中高生の居場所が今ない。わずらわしさのない、フリースペースが必要。場所と机とイスと自動販売機がある程度でイベント情報が見られる。それだけで高齢者から子育て親子、中高生もふれあっていける。榎町児童センターでは中高生のスペースがあり、集まる場所、学習できるスペースもある。すべての児童館にとはいかないだろうから、四谷のひろばでは、今、中高生がふらっと行けて、交流できるそういうフリースペースがあるとよい。

部会長

何か質問、ご意見があれば

委員

区民会議にも出席している。子育ての分科会に所属し、親教育について話している中で、児童館では、親子で遊べる時間を設けていたり、子育て支援センターも4箇所が増えていますが現状の新宿区が何をしているか分かっていない人が多いと感じた。

区民会議でも話している。区民会議の分科会と次世代育成協議会との違いは何か。

事務局

区では10年単位の次の基本計画をつくるにあたっての提言をいただくために、区民会議を設置している。基本計画は大きな枠組みで、お金の担保はない。基本構想を具体化するため、基本計画があり、更に具体的にどのくらいのお金を使う枠組みの事業を行うか実施計画を立て行っている。次世代育成協議会は、次世代育成計画の進行管理を行ったり、新たな課題や問題があれば、計画の見直しを行うなど、個々の施策と関わりのある極めて具体的なことを扱う。また、この協議会は、次世代育成支援計画の推進と参加する団体の役割を踏まえて、地域の連携、協力の体制をどうするか提言していくための協議の場でもある。

委員

縦割りが多すぎる。附属団体が多すぎる。統合化できないか。育成会でも行事をやり、文科省の居場所事業を学校でやり、同じことを同じ時期にやっている。横の連携が図れない証拠である。忙しい学校の先生に色々な要望をするのは申し訳ないが、学校や行政が中に入っていないといつまでも変わらない。

事務局

こういうことも提言として出してもらえればよいと考えている。こうすればよいと考えてもらえればよい。

部会長

今のことからすると、連携協力は大変大切だということ。提言として地域の連携協力という点でまとめてもいいのではないかと。そういう会議にしたい。

次世代という新しいくりが出来、変化してきている。今までは「青少年育成」「子育て」と別のものとしてとらえていたが、それを一連の繋がりと考えていくことになった。

それとの関連で、「親の意識改革」「大人の意識改革」とは具体的に何をどう変えていくのか、現状はどういう問題があるのか。もう少し掘り下げてみると、変えてほしいと思っている側自身がどう変わっていくのか。ということが逆に降りかかってくる。そこをどうするのか。もう少し整理しなければならない。

委員

地域でもマンションが増え、交流や挨拶がない。それを根本として直していく必要がある。

委員

隣近所との声かけがなく、となりの住人ですらわからない。根本の挨拶ができない。親の姿勢から改革が必要。

地域の防災訓練にも、校長、副校長は来るが、学校の先生も PTA の役員も来ない。子どもを守る立場である親も教師も真剣に地域との関わりを考えていくべきではないか。

部会長

その問題を考えると、挨拶がないのが悪いと考えるのか、挨拶をするということがどうということなのか考える必要がある。また、“先生が防災訓練に来ない”それだけを見れば確かに問題だが、それが来ない状況は何によって作られているのか、非常に複雑である。そこを考えるのがこの場であるのではないか。

親を意識改革するということは、何をどう変えるのか。一方、子育てが孤立化して、自分だけで抱かえてしまっているから、相談もできず困っている現状。では、それをどうサポートできるか。

委員

P H P での提言では、親の教育をおこなう専門の先生を学校に置くとしている。

委員

これに関連して、教育委員会も啓発してそれに基づいて親育ての学習のための先生などを配置して保護者の学習をする。そういったことを新宿区も考えて、その中で挨拶とは何かを親に説明しなければならないということなのか。

部会長

そういうことではなく、逆にそういう言葉で説明してやらせることなのかということ。

委員

小学校に上がった途端に保護者が出てこなくなる。先生のやる気がなくなっている部分もあるが、応援する母親たちも少なく、学校を親が盛り上げていくことが少ない。盛り上げれば、学校もやる気を出していくようになる。今は、防犯等でがんじがらめになってしまった。

ある先生が“命の教育の大事さ”を訴えたいと言ったが、今では安全が重視され中々通じないとのこと。それも最もだと思う。私はいろいろな団体が所属している育成会に期待している。

部会長

相手の非をあげつらう、相手の問題点を言うことは、今の状況が益々かたくなになってしまう。自分たちもこう変えるから一緒にやっという姿勢が大切。親の態度を変えるということは理解できるが、学校もがんじがらめになっている。必要以上に神経をとがらせ、それをやらないわけにはいかないという状況がある。相手に対する変化を要求し、その要求をぶつけられた方は困ってしまうという状況も理解しなければならない。そこにどういうキャンペーンをはれるのか。

委員

親を直すのに、では何をするか。地域でいろいろやっているが、拡がらない。参加すると良さがわかるのだが。どうしても先ほどの議論が先に出てしまう。

部会長

地域を見ると学校と地域が密着している点が、新宿はすばらしい。学校が地域住民にとって迷惑施設になっているところもある。

委員

新宿というのはいいいイメージがないが、とてもいいものを持っている。これをどう伸ばしていくかということなのであろう

警察

警察では、セイフティ教室を実施しているが、子どもに関する事件、事故については非常に反響が大きいのに、保護者の方の参加は非常に少ない。人が集まらない。その代わりに、育成会の人たちが集まっている。育成会をより活発化させることが、保護者を変える近道だと思う。

警察

少年犯罪でも、親が放任だったり、無関心だったりする。親は子どもに対して問題意識を持ってない。

委員

次世代の交流を、学校週5日制になり、当初は空き教室を使っていたが、防犯面で使いつらくなってきた。地域の拠点として地域センターがあるが、安全で使える場所であらゆる世代の拠点になるのではないか。

部会長

学校が利用できないのは、行政との連携の問題。校長をやっていたので分かるが、もっと学校を使う方法を考える。例えば、学校開放でガラスを割られて、翌日の授業に差し障る。その場合、割られた際の修理体制が決められていれば問題ない。それができていないから問題なのだ。かなり行政的な問題であり、発想を変えれば、学校というものはもう少し使いやすくなる。学校が一番親しみやすく、慣れている場所なのだから、そういう風に発想を変え、もっと学校を活用すべきである。

委員

育成会でも夏休みに校舎の中に入るという行事を行った。学校が避難所になっているが、学校への避難訓練はやっていないので、夜に行くことにしたが先生の中には、校舎に入られるだけでもいやだという先生もいる。

また、挨拶が、区の目標の「安心・安全」にもつながっていく。いつも家の前で、子どもたちに声をかけ、挨拶している。地域は地域に住んでいる人がつくると意識が大切。

部会長

前回5つの課題を設けたが、課題の「ハード面」は別のくくり。課題の 、 、 は、似ている。子どもを取り巻く環境づくり地域のなかの子ども、地域と親をベースとして、それを支える育成会活動、 をまとめて提言していく。

青木委員の発言の趣旨は重要

挨拶をすると、大人が気持ちいいのではないか。子どものためにということではなく、大人自身が気持ちよく地域で過ごすために、子どもと挨拶をしたいと考えれば発想が変わる。自分にとって地域住民の一人の大人として何が気持ちいいという発想に変える。

委員

引越ししてきた人が、挨拶できたのが嬉しかったと聞いたことがある。孤立している

のではなく、きっかけがないだけ。子は、親の姿を見て育つから、見て真似していく。逆に子の姿を見て、親も変わっていく。

部会長

自分自身が気持ちよくなるためと、発想を変え考える。

親の出席率が悪いという話があったが、出席してくれる親が多ければ、話す側が気持ちがいいという発想に変えれば、違う視点になる。我々自身の問題として考えれば少しは解決策が見えるのではないか。

をまとめ、一年かけてじっくり考えて行きたい。ということ報告したい。それに踏まえ、今回充分討論できなかったが、ハード的なことも心に留めて考えていきたい。

委員

地域の人が、関わるきっかけは育成会である。

消防署

心の東京革命と今、話していることは共通するところがある。お題目にだけにならないようにしなくてはいけない。

まとめ 事務局と整理すること